

安部公房小説作品研究
——一九六〇～七〇年代をめぐって——

立教大学文学研究科日本文学専攻博士課程後期課程
河田綾

論文の目次

序章	安部公房小説作品研究——一九六〇～七〇年代をめぐって
第一章	「われわれ」の行方——『砂の女』・「人魚伝」
第二章	〈中折れ〉する「ぼく」——『他人の顔』
第三章	「はったり」を編む——『榎本武揚』
第四章	失踪の修辞法——『燃えつきた地図』
第五章	空白の「イメージ」としての〈安部公房〉——「周辺飛行」
第六章	「箱」の中のオナニズム——『箱男』
第七章	両義性の「襲」——『密会』
終章	小説家・安部公房
参考文献	
初出一覧	

論文の要約

本研究は、1960～70年代における安部公房の小説作品の創作実践を詳らかにすることを目的とする。既によく知られるように、安部の創作活動は、詩作に始まり、小説、演劇、映画、ラジオ、テレビなど複数の芸術ジャンル・メディアに跨る形で行われた。また、日本共産党党员としての政治活動、演劇集団安部スタジオでの演出家としての働き、桐朋学園短期大学教授としての顔、簡易着脱型タイヤチェーン「チェニジー」の発明など、文筆家に留まらない多彩な活動に従事した。ジャンル横断的で様々な顔を持つ安部公房という作家について研究するにあたり、本研究が主な対象とするのは60～70年代の小説作品である。安部公房という表現者を総合的に考察する機運が高まりを見せる中で、本研究は、改めて小説家としての姿を問い直す。とりわけ、60～70年代の小説に的を絞るのは、安部の小説家としての活動が広く一般に受け入れられた時期でもあり、また小説創作が最も円熟した頃だと捉えられるためでもある。これらの点から、本研究は約20年間の小説作品一つひとつを丹念に読み解くことを通じて、小説家としての安部の軌跡を描出する。そして、最終的にこの研究が目指すのは、安部の小説の方法論を問うことによって、小説を書くとはどのような営為であるかを問うことでもある。

第一章では、1962年6月に発表された『砂の女』と「人魚伝」について論じる。安部にとって1962年は作家的メルクマールと呼ぶに相応しい年であるが、同年に発表された二つの作品は、『砂の女』と比して「人魚伝」に関する研究の蓄積は未だ十分ではない。しかし、この二つの作品は以降の安部の小説における方法論を問うにあたって、極めて重要な共通性を有している。両作品の読解を通じて明らかにするのは、女をある種の謎として捉え損ねる男という小説のプロットである。登場人物の男は、女に対する了解不可能性から、自己の内に複数の自己を招来し、自問自答の坩堝に陥り、さらにはそうして築き上げた自らの「物語」に拘泥することとなる。このような思い込みに満ちた自己の「物語」に閉じこもっていく男たちを総称する「われわれ」という主体の複数性が、二つの小説を構成する。これらを明らかにすることで、男たちの紡ぎ出す「物語」の内実を問うていく。

第二章では、1964年9月に発表された『他人の顔』について論じる。多くの文学作品や研究書が明らかにするように、60年代の中ごろは性を描くことが問題化された時代であった。そうした状況下にあって、安部もまた、性を描くことに自覚的な作家の一人であった。とりわけ『他人の顔』においては、安部自らが意識的に性を描くことに取り組んだ作品と位置づけている。このような作品を問うにあたって、本章で特に注目するのは、妻へと宛てた「ぼく」の手記が極めて独善的に紡がれる点、夫婦間の性的関係の回復のための手段であった「仮面」が自立した人格を持って「ぼく」を阻むようになる点である。「他人」としての「仮面」を用いて妻との性的関係の回復を目論むことは、そのまま「ぼく」の「痴漢」化を招くことになるが、本作の特徴は「痴漢」としての行為が完遂されず

に、その途中で頓挫する〈中折れ〉の状態が終わる点にある。これらは、性を描くことが「ぼく自身の脳内のひだの間」の問題であったと自作解説する安部の発言に照らせば、性に対する欲情が他者へと向わず、自己のうちで空転するところに、その特質を見出すことができる。このような作品分析を通じて、性を媒介として「他人」との「通路」を模索することの不可能性をいかに描いたかを明らかにする。

第三章では、1965年7月に発表された『榎本武揚』について論じる。本作はこれまで、安部の政治的「転向」を描いた作品として読み継がれてきた。そのような政治的「転向」の作品として本作を鑑みたとき、榎本武揚を通じて描こうとした「忠誠」でも「転向」でもない「第三の道」とはどのようなものであったのかが問題となる。本作において榎本は「稀代の話し上手」と評され、「はったり」を駆使して聞き手を混乱に誘う人物として描かれる。そのような榎本の「はったり」は、本文の記者兼編集者である「私」の介入によって、その真偽を一層不確かなものとし、最終的に榎本の真意は明かされぬまま読者に投げかけられる形で作品の幕を閉じる。これらを確認した上で、「忠誠」も「転向」も破壊する「第三の道」として選択されたのが、「はったり」を駆使する語り口と疑惑を編成する小説の方法論であったことを明らかにする。以上を踏まえ、日本共産党除名以降、政治的運動から身を引いた安部の小説家としての矜持に迫る。

第四章では、1967年9月に発表された『燃えつきた地図』について論じる。本作の主人公「ぼく」は、自動車を駆使して失踪事件を追う探偵である。失踪事件の解明を主調としながら、謎に満ちた依頼人の女とのやりとりによって「ぼく」は次第に自己を見失い、自らも失踪者と化す。事件の謎を追う探偵小説の形式でありながら、何らの解決も見ることなく、謎が謎を呼ぶ形で幕を閉じる本作は、様々な修辞法によって読む者をも失踪へと導く。本章において考察の手掛かりとするのは、本文中における自動車運転に伴う速度感覚の攪乱と、それを表す「……」を多用した文体である。これらに着目することで、失踪を描く上での言葉の動態を問うていく。

第五章では、1971年3月から1975年6月にかけて連載された「周辺飛行」について論じる。これまで「周辺飛行」は、連載時に「創作ノート」と位置づけられたことも相俟って、特定の作品を探る手がかりとして参照されてきた。これに対して本章では、副次的なものとして「創作ノート」を位置づけるのではなく、「周辺」であることそれ自体を問題化する。すなわち、作品へ至るまでの断片、もしくは作者の構想や着想といった暫定性の下に置かれた言葉の軌跡を明らかにする。本連載の文章形態は「創作ノート」という表現形式ゆえに多岐に及ぶ。多様な文章形態から、「因果律」に基づく物語を破砕する身体表現としての「ニュートラル」、夢を見る主体の身体性と「意味」の生成、これらを明らかにした上で、「意味」に収斂することのない「イメージ」の構築が主体の身体性と密接な結びつきを持ちつつ、しかしそれには反発せずにいられない作者の苦悩を繙いていく。本連載は、言葉を乗り越えるために言葉を生み出し続けるというジレンマを抱えつつ、言葉の

意味を無化し続けることで、統一的な作者像にはたどり着かない空白の「イメージ」を遂行的に立ち上げ続ける。以上の考察によって、同時期における安部の創作の方法論に迫る。

第六章では、1973年3月に発表された『箱男』について論じる。これまでの『箱男』研究においては、「箱男」とは誰かとの問いを發するところから作品を論じがちであったが、本章では複数の書き手が錯綜する場として「箱男」を問い、そこで書かれた言葉がいかなる特質を有するかを考察する。その際、読解の手掛かりとするのは、オナニズムの観点である。「箱男」は「箱」の中で自慰に耽ることによって、自己の身体のうち他者の身体を虚想し、分裂・増殖した「性的他者」を無数に立ち上げる。複数化した「箱男」は、その真贋及び「彼女」を覗く権利をめぐる対立するが、このことは、自らの欲望を先延ばしにして、快楽を貪り続ける「箱男的」性質の一端を示す。真相・真実の所在を明らかにすることに失敗し続け、最終的に決定不可能性へと陥る「箱男的」叙述は、絶えず言葉の結びつきを脱臼させながら統一的解釈を拒む形で延々と続けられる。こうした読解を通じて、『箱男』の閉塞性の機制を読み解く。

第七章では、1977年12月に発表された『密会』について論じる。本作の病院は、弱者と強者、異常と正常、病気と健康といった対立する論理が支配する空間として描かれている。そこに突如として紛れ込んだ「ぼく」は、次第に病院内の論理に絡め取られていく。しかし、対立関係にある二項は絶えず交錯、溶解、混線し、何度もその対立構造を攪乱する。これらを確認したうえで、病院空間にあって二項対立の構造の中に位置づけられない「溶骨症」の「娘」について考察を行う。彼女は、「ぼく」や「馬」といった男たちによって、「完全患者」という徹底した弱者と捉えられる。結末部において「ぼく」と「娘」は、作中における対立構造の無化された地平に取り残されることとなる。それは「娘」の身体が「人間」の形相から遠ざかって「襞」を形成するのに類似した、あらゆる対立図式の折り畳まれた時空間である。これらを繙いたうえで、ジル・ドゥルーズの「襞」の概念を援用し、弱者を描くということがいかなる形で実現可能かということをも明らかにする。

終章では、これまでの作品分析を通じて、安部にとっての小説を書くことの意味について総括する。安部は、小説を「言葉によって言葉に逆らう」言語表現と捉え、「小説は小説である」ことによってその自立性を担保すると捉えた。その意味で、安部の描く小説は、言葉の有機的な結びつきを何度も脱臼させ、連続と断絶を繰り返すことで、意味に収斂することのない豊穡なイメージの世界を構築する。したがって、小説は言葉を用いる表現でありながら、しかし、それを否定することによって成り立ちうる「異端」な言語表現であるといえる。こうした小説の力に自らの生を託すことが、小説家・安部公房にとっての方法論であったと結論づける。